

論説

三陸沿岸に大きな被害をもたらしたチリ地震津波（1960年

5月）を教訓に、災害時に誰もが避難できるようにと、自宅に「らせん階段」を設置。

2011年の東日本大震災で住民らの命を救った住宅が、震災伝承施設として保存される。

気仙沼市内の脇にある阿部長商店の旧阿部家住宅で先日、保存工事がスタートした。震災から10年目となる来年3月の工事完了を目指す。震災を後世に伝えるとともに、防災の重要性を国内外に発信する新たな施設として役割を果たすことを期待したい。

旧阿部家住宅（3階建てビル）は、昨年4

月に他界した、水産業や観光業を営む同商店創業者である阿部泰児会長（享年85歳）が、震災の5年前に、本社長兼自宅だったビルの屋上に続く外付けの、らせん階段を設置した。周辺に高台が無く、災害時の避難に時間がかかる地域住民を案じた阿部会長が、チリ地

震災伝承施設

「命のらせん階段」保存へ

震津波の経験も踏まえ、て階段を取り付け、避難場所として訓練も行った。

震災時には、20人が階段を使って屋上に逃げ、命をつないだ。住民らを救ったこの階段は「命のらせん階段」として昨年3月、震災伝承ネットワーク協議会（事務局・東北整備

局）の震災伝承施設に登録された。

震災伝承に力を入れている同社では、この貴重な施設の保存を決め、これまで準備を進めてきた。

現在地は、市が整備する復興市民広場（5分）内に当たるため、市では移転先として北東に約95分離れた市有

地（約1500平方メートル）を確保。ビル（約400平方メートル）を木造部分と鉄骨部分に分け、曳家工法によって移動させる。

同社が経営する南三陸ホテル観洋では震災後、早々に社員による語り部事業を展開。バスで南三陸町内を巡回しながら震災を語り続けているほか、全国規

模の震災イベントも繰り広げ、防災・減災の意識を高めている。

今回保存される施設が今後、市震災遺構・伝承館や、震災を伝え続けているリアス・アーケ美術館とも連動。南三陸、気仙沼両市町との施設連携によって伝承事業がさらに活発化してほしい。

阿部会長の長女で、同観洋の女将・阿部憲子さん（58）は「震災の教訓を50年、100年先まで伝えていくことが、会長の思いであり、私たちの役目」と語る。

復興事業が着実に進む中で、懸念されるのが震災の風化である。時が過ぎても被災者の痛みが癒えることはない。その思いを伝え続けることが、被災地の使命でもある。